中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第20巻 第1号（2021）1頁

巻頭言

中京大学心理学部長　　小島　康生

中京大学心理学部が旧文学部心理学科を改組して誕生したのは，2000年のことである。実験，応用，臨床，発達の4つの主要心理学領域を擁し，心理学の多様な知識を網羅的に学ぶことができる，国内初の「心理学部」であった。そしてこの間，3,097名の卒業生を世に送り出してきた。

さて，心理学部は今年めでたく二十歳を迎えた。人でいえば，成人となり，ようやく一人前の大人として社会での活躍が期待される時期にあたる。先日調べてみたところ，いまわが国には，「心理学部」を名乗る大学が17ある。そのなかで初めて二十歳の節目を迎えた中京心理は，このあと，どう，さらなる変化・成長を遂げていくか。

思うに，心理学という学問への関心は，この20年のあいだに確実に高まってきた。その経緯に大きくかかわるのが，東日本大震災をはじめ自然災害の増加，少子高齢化の急速な進行，貧困の格差拡大など，地球・社会環境の劇的な変化であろう。専門的な知識とスキルを兼ね備え，人々の心理支援に携われる人材を育成すること，その要請や期待はこれまでになく高まっており，公認心理師の国家資格化も，こうした背景が追い風となった感がある。人の心は，環境や社会情勢の変化と共にある。それは，長くヒトの歴史を通じてそうであったし，どの20年を切り取っても同じに違いないが，とりわけこの20年は，心というものへの人々の関心がひときわ高まったように思える。二十歳を迎えた当心理学部が，社会で活躍できる有能な人材を今後も輩出していくためには，社会の変化に対する感度を常に保ち続ける必要があろう。

奇しくも，2020年，世界は歴史上まれにみるパンデミックに襲われた。授業のオンライン化を余儀なくされ，特に新入生には，入学早々9月まで，一度もキャンパスを訪れることができないという，前代未聞の状況となった。

われわれ心理学を専門とする者に何ができるか，今年ほどそのことに思いを馳せた年はなかった。キャンパスで授業を受けるという当たり前の日常が奪われた学生の身になって，教員どうしが知恵を出し合い，いくつかの取り組みを実施した。そのなかで，「これぞ心理学のお家芸」と痛切に感じたことがある。それは，人の心を思いやる心の大切さ，そして学生の直面している困難や問題についてデータをあつめ，エビデンスに基づいて発言，行動することの重要性であった。

コロナの感染拡大はいまも続き，さらに深刻な状況へと広がりつつある。今後の行く末を見つめながら，心理学にさらに何ができるか熟考し，それを学生の教育にも生かし，伝えていきたい。

心理学は，今後もわれわれの生活を豊かにする大きな力を持ち続けるだろう。学部創設20周年の今年を新たなスタート地点に，さらなる飛躍を誓いたい。